

PC 技術協会のおゆみ

協本 優*

1. はじめに

社団法人プレストレストコンクリート技術協会（以下 PC 技術協会）は、昭和 33 年（1958）2 月 21 日に創立し、昨年 50 周年を迎えている。

これを記念し、PC 技術協会内の資料、記録をとりまとめ「50年の歩み」を発刊することとしている。その資料を用い、PC 技術協会の主要な活動記録などをここで紹介する。

新たなことに取り組むためには、過去を知ることから始めなければならない。まだ、PC 技術協会勤務が 1 年ほどの事務局長であるが、PC 技術協会の生い立ちを知ること、これからの業務に生かせることが多数あるのではないかと考え、大役を引き受けることとした。

PC 技術協会の活動を記録した資料としては、「理事会議事録」第 1 回（昭和 33 年 4 月）～第 520 回（平成 20 年 12 月）、「会報第 1 号」（昭和 33 年 9 月）、小冊子「30年の歩み」（平成元年 5 月）、そして会誌「プレストレストコンクリート」第 1 巻 1 号（昭和 34 年 1 月）～第 50 巻 6 号（平成 20 年 11 月）などがある。

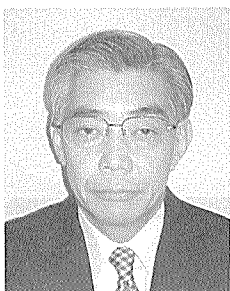
とくに、会誌では次の特集号などで PC 技術の歴史に関して記載されている（表 - 1）。

表 - 1 会誌における PC 技術の歴史に関する記載

会誌の特集などの内容	発行年月
第 20 巻 1 号座談会「PC 技術の近況と将来について」	1978 年 2 月
第 25 巻 6 号特集：これまでの PC 構造物をふり返って	1983 年 11 月
第 30 巻 1 号特集：PC のあゆみと未来	1988 年 1 月
第 42 巻 1 号小特集：PC の思い出と今後	2000 年 1 月
第 42 巻 6 号特集：PC 技術の歩み	2000 年 11 月

第 42 巻 6 号では、第 5 代事務局長の筒井武徳氏が PC 技術協会設立の経緯などを詳しく記述されている¹⁾。

ここでは、記録についてはその後 10 年分を追加し、50 年分として紹介するが、重複する部分については、簡単に



* Masaru WAKIMOTO

(社)プレストレストコンクリート
技術協会 専務理事・事務局長

記述して、主にその後の推移について書いてみたい。

2. PC 技術協会設立の趣旨および経緯

プレストレストコンクリート（以下 PC）は、昭和 27 年にわが国において初めて企業化された。以来、天然資源に恵まれない日本にとっては、非常に有効適切な工法として土木ならびに建築の各界から認識され、その需要は急速に増加した。そのため、PC 技術の確立および普及は当時誠に重要かつ緊急なことであった。

また、技術の進歩、発展を促進するためには、国際的な連携が必要なことはいうまでもないことである。そのため、わが国 PC 技術者の知識を結集し、その組織を以てプレストレストコンクリート国際連合である FIP（Fédération Internationale de la Précontrainte）に日本を代表して加入し、国際的協力を図る必要があった。

以上の趣旨から昭和 33 年（1958）2 月 21 日、土木学会、日本建築学会、農業土木学会の有志が発起人となり、PC 技術協会が創立された。

その後、任意団体であった PC 技術協会は、昭和 34（1959）年 4 月 30 日の定時総会で、なお一層の PC 技術に関する学術、調査研究ならびに国際交流による成果の普及と振興を図るため、民法第 34 条による社団法人への改組が決議された。それを踏まえて、同年 12 月 2 日に「社団法人プレストレストコンクリート技術協会設立申請書」を建設大臣宛に提出し、翌年の昭和 35 年 3 月 29 日に許可され、現在の (社) PC 技術協会が誕生したのである²⁾。

3. PC 技術協会の推移

3.1 PC 技術協会ロゴマークの誕生

会誌の表紙などに用いられているロゴマークは、実は公募で募集されたものである。

PC 技術協会が社団法人となったことを機会に、協会ロゴマークを作ることになり、会誌編集委員会で検討して、会員から公募することとなった。応募作品は 17 点であったが、厳正に選定した結果、PC の大先達である吉田宏彦氏の作品が見事当選し、ロゴマークが誕生した。

構造的なイメージを JPCEA（Japan Prestressed Concrete Engineering Association）の文字で表し、全体として鳥居で日本を感じさせるこのロゴマークは、会誌第 3 巻 2 号昭和



図 - 1 PC 技術協会ロゴマーク

36年(1961)4月の発行号から表紙を飾ることになった³⁾。現在では、PC技術協会のロゴとして会誌以外にも頻繁に利用されている。

3.2 歴代会長

昭和33年(1958)2月の創立総会で初代会長に吉田徳次郎氏が就任して以来、現役魚本健人会長まで28代の方が会長職を務められている。ほとんどの方は2年の任期を務められたが、21代の藤井 学会長は在職中に他界され、鈴木素彦副会長が代行を務められた(表-2)。

表-2 歴代会長

代	氏名	在任期間	代	氏名	在任期間
1	吉田徳次郎	昭33.2～35.4	2	坂 静雄	昭35.4～37.5
3	友永 和夫	昭37.5～38.5	4	坂 静雄	昭38.5～40.5
5	松田 俊正	昭40.5～42.5	6	吉田 宏彦	昭42.5～44.5
7	田原 保二	昭44.5～46.5	8	大島 久次	昭46.5～48.5
9	仁杉 巖	昭48.5～50.5	10	梅村 魁	昭50.5～52.5
11	山田 順治	昭52.5～54.5	12	鳥田 専右	昭54.5～56.5
13	河野 通之	昭56.5～58.5	14	小倉弘一郎	昭58.5～60.5
15	猪股 俊司	昭60.5～62.5	16	中野 清司	昭62.5～平1.5
17	君島 博次	平 1.5～ 3.5	18	六車 熙	平 3.5～ 5.5
19	池田 尚治	平 5.5～ 7.5	20	本岡順二郎	平 7.5～ 9.5
21	藤井 學	平 9.5～ 9.9	22	鈴木 素彦	平 9.9～10.5
23	田邊 忠顯	平10.5～11.5	24	田邊 忠顯	平11.5～13.5
25	山崎 淳	平13.5～15.5	26	渡邊 史夫	平15.5～17.5
27	辻 幸和	平17.5～19.5	28	魚本 健人	平19.5～

本来であれば、ここで歴代会長の功績を紹介すべきであるが、3月発刊予定の冊子「50年の歩み」では、PC技術協会年表に歴代会長の氏名を掲載し、歴代会長とPC技術協会のできごとの関連をわかりやすく示したので、そちらをご覧ください。

なお、4代目事務局長の後藤武雄氏が30周年記念の会誌「サロン」で、すでに他界されていた元会長の吉田(徳)、松田、田原、吉田(宏)の4先生の印象あるいは思い出を記述されていることを、お知らせする⁴⁾。

また、現在のPC技術協会があるのは、歴代会長のご尽力やご指導のお陰であり、感謝の念に堪えない。

3.3 歴代事務局長

昭和33年(1958)7月の理事会で初代書記長として日笠育夫氏が選任されてから、現在まで8代の方が事務局長を務めている(表-3)。

表-3 歴代事務局長

代	氏名	在任期間(在任年月)
初代	日笠 育夫	昭33年7月～35年1月 (1年7ヵ月)
2代	小早川貞三	昭35年1月～41年5月 (6年5ヵ月)
3代	安芸 龍一	昭41年5月～51年6月 (10年1ヵ月)
4代	後藤 武雄	昭51年6月～63年3月 (11年10ヵ月)
5代	筒井 武徳	昭63年4月～平9年7月 (10年4ヵ月)
6代	桑山 誠	平 9年7月～16年5月 (6年10ヵ月)
7代	藏 慎一	平16年5月～20年5月 (4年)
8代	脇本 優	平20年5月～

日笠氏は協会の発足後の難しい運営を会長と力を合わせ、社団法人への改組、事業の強化、会員の増強に力を注ぎ、協会の基礎作りにも貢献された。しかし、病で他界され1年半程の在職であった。

その後、徐々に在任期間が長くなり、最長は4代目の後藤武雄氏が12年程勤務されている。それ以降は、前任者の蔵事務局長まで、少しずつ在任期間が短くなっているようである。

前任の蔵事務局長から局長業務などを教わったが、現在は教えられたとおりに実行するのが精一杯であり、今後、少しでも早く局長として役立ち、頼りにされるようにになりたいと願っている。

なお、先日桑山元事務局長より電話があり、お元気そうであったが、昨今のPC業界の厳しさからPC技術協会の幾末を心配されていた。つねに見守ってくれる先輩がおられることは、心強いことである。さて、事務局長を少し経験してみても、裏方としての局長業務の大切さが身にしみてわかり、歴代事務局長のご苦勞には頭が下がる思いである。

3.4 会員数および会員の変遷

昭和33年(1958)2月の発起人会で、PC技術協会を設立することになり、会員を募集したところ82名の応募があり、PC技術協会の創立総会を開催している。よって、最初の会員数は82名であった。その後、昭和35年(1960)3月の社団法人認可時には、会員の獲得に精力的に動いた結果、492名となっている。また、社団法人認可に伴い賛助会員を募集したところ、昭和35年度末で45社(団体)の応募があった。

その後も、順調に会員数を伸ばし、昭和44年(1969)末で個人正会員が1686名となった。また、この年には賛助会員を、法人正会員と賛助会員に分離することになり、賛助会員に法人正会員への移行を働きかけたところ、賛助会員95社のうち30社が法人正会員となった。

個人正会員は、昭和50年(1975)度末まで順調に数を増やしてきたが、会費滞納者も増えてきたので、昭和51年(1976)度末に会費滞納者を整理したところ、前年度比124名減の2261名となった。

一時的には、個人正会員数を減らすこともあったが、積極的に個人正会員の増加に努めた結果、個人正会員の人数が最高になったのは、平成15年(2003)度末の4082名であった。

しかし、次年度からは建設業界の厳しさを反映して大幅に会員数を減らして、平成19年(2007)度末には3233名となり、ここ4年間で849名の大幅減となっている。また法人正会員、賛助会員も同様に減少してきて、平成19年(2007)度末では、法人正会員29団体、賛助会員103団体となっている(図-2)。

今後、会員の増加は難しいかもしれないが、減少をくい止めるためには何らかの方策が必要である。それには学生会員の導入など、幅広い層への拡大を図ることなどが考えられる。

そのためには、PCシンポジウムなどのPC技術協会行事への学生の参画や、PC技術に限定せずに、コンクリートの構造分野への活動拡大など、PC技術協会の脱皮検討が必要と思われる。

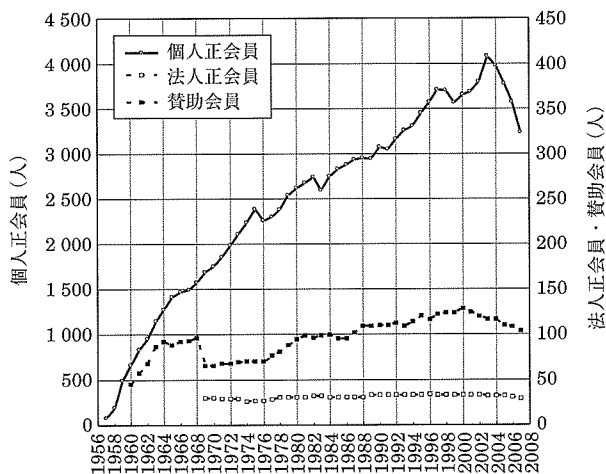


図-2 会員の推移

4. PC 技術協会と FIP および fib との関係について

4.1 FIP (国際プレストレストコンクリート連合)

FIP (Fédération Internationale de la Précontrainte) は、1952年に設立されたプレストレストコンクリートに関する国際的な組織である。PC 技術協会は、1958年の設立直後に日本を代表して FIP に加盟している。

FIP 理事会、幹部会および各種技術委員会に委員を派遣して、FIP の重要な運営方針などの審議に参画し、活発な国際的活動を展開している。さらにはシンポジウムなどに毎回多数の会員が出席し、種々の報告を行ってきた。

そして、1993年には PC 技術協会主催による、わが国初めての FIP シンポジウムを京都で開催した。世界 38 カ国から総勢 761 名の参加者を得て盛況であった。

4.2 fib (国際構造コンクリート連合)

fib (fédération internationale du béton) は、コンクリートおよびコンクリート構造に関する世界唯一の国際組織であり、1998年に FIP と CEB (欧州国際コンクリート委員会: Comité Européen du Béton) とが統合することにより、新たに発足した。

わが国では、PC 技術協会と日本コンクリート工学協会が加盟組織となっている。主に、PC 技術協会は構造分野、日本コンクリート工学協会は材料分野を担当している。

2002年に fib としての最初のコンGRESを大阪で、PC 技術協会と日本コンクリート工学協会が共催で開催した。世界 58 カ国から総勢 1 832 名、論文発表 683 件という大規模なコンGRESであった。以来 4 年に一度コンGRESが開催され、その間に毎年シンポジウムが開催されている。

4.3 国際会議におけるメダル受賞について

FIP および fib では、コンクリート構造の分野における顕著な貢献された方々にメダルを授与している。わが国では、次の方々メダルと賞状を受賞されており、素晴らしいことである (表-4)。

表-4 メダル受賞者

Freyssinet Medal	
1986年	猪股 俊司
FIP Medal	
1974年	猪股 俊司
1982年	中野 清司
1993年	六車 熙
1993年	池田 尚治
1998年	森元 峯夫
fib Medal of Merit	
2007年	角谷 務

5. PC 技術協会の主たる事業

5.1 会誌の発行

会誌「プレストレストコンクリート」第1巻1号は、昭和34年(1959)1月30日に発行された。PC 技術協会創立からわずか1年弱で、わが国に初めて実現したプレストレストコンクリートの学術専門誌 (B5判) である。

PC 技術協会は、「PC 技術に関する各般の事項にわたりその普及と振興を図ることを目的とする」ことから、この目的を達成させるための事業の一つとして、会誌の発行を行っている。

第1巻は季刊(1~4号)としたが、第2巻以降は隔月発行の年6回(1~6号)とした。

事情により第8・9巻(昭和41~42年)は年4回、第10・11巻(昭和43~44年)は年5回発行という時期もあったが、その後は年6回の発行を現在まで続けている。

また第29巻~第33巻までは、特別に年6回に加えて特別号の発行を企画し、年間7冊発行したこともあった。

体裁、内容については、第26巻から表紙をカラー写真に改めるとともに内容の充実を図った。

そして、平成8年頃から他誌ではカラー写真が用いられるようになったことより、第40巻1号より、1題につき1頁のカラー印刷を採用することとした。

また、中央官庁の行政サイズの変更に伴い、第40巻1号から A4判に改めて現在に至っている。現在の年6回の発行内容は、基本的には特集号3巻、一般号3巻となっている。

いくたびかの社会情勢の変遷があり、その影響をうけることも多いなか、魅力ある会誌として発行され続けて来られたのは、熱心に奉仕活動をされている優秀な会誌編集委員と PC 工学に碩学の歴代編集委員長のご活躍に追うところが大きい (表-5)。

表-5 歴代会誌編集委員長

代	氏名	在任期間	所属
初代	猪股 俊司	1959 ~ 1974	(株)日本構造橋梁研究所
2代	神山 一	1974 ~ 1976	早稲田大学教授
3代	本岡順二郎	1977 ~ 1977	日本大学教授
4代	西澤 紀昭	1977 ~ 1983	中央大学教授
5代	池田 尚治	1983 ~ 1990	横浜国立大学教授
6代	山崎 淳	1990 ~ 1997	日本大学教授
7代	辻 幸和	1997 ~ 2003	群馬大学教授
8代	二羽淳一郎	2003 ~	東京工業大学大学院教授

現在の会誌編集委員会は、二羽委員長のご指導の下、魅力的な会誌として、講座の復活など、さらなる内容の充実と表紙デザインの一新を企画しているところであり、ご期待ください。さらには、PC技術協会パンフレットの更新やホームページ構成の検討、そして、合理的な編集を行うための編集マニュアルの改訂など、PC技術協会のため精力的に活動されており、感謝している。

5.2 PC技術協会賞

PC技術協会賞は、本協会設立の発起人であり、第2代、第4代会長を務められた坂静雄博士が昭和47年(1972)に、学士院会員になられたのを記念して、坂博士からの寄付金を基金として、坂博士研究奨励金制度が設けられたのが始まりである。

この制度は、年間の優れた論文、作品、研究等の優秀なものに奨励金を授与して、PC技術の向上、ひいては業界の発展に寄与する趣意で始められた。

最初は昭和48年度(1973)の論文賞に始まり、昭和52年度(1977)から作品賞、昭和63年度(1988)から技術開発賞、平成16年度(2004)から施工技術賞が加えられ、現在に至っている。昨年度までの受賞件数および種別は(表-6)のとおりである。

表-6 授賞件数と内訳

年度	賞名	授賞件数			
		橋梁	建築	その他	
自1973年至2007年	論文賞	88			
自1977年至2007年	作品賞	129	99	21	9
自1988年至2007年	技術開発賞	44	31	3	10
自2004年至2007年	施工技術賞	13	13	0	0

5.3 PCの発展に関するシンポジウム

PCシンポジウムの前身は、昭和36年(1961)に始まった第1回「年次学術講演会」である。会誌編集委員会の所轄事業として開催され、第6回までその名称が用いられていた。

第93回理事会(昭和41年10月11日)でその内容からして名称が不相当であるとの議論があり、第7回からは「研究発表会」と名称を変更している。第29回まで年に1度、東京で開催してきた歴史のある事業である。

平成2年(1990)に、第30回になるのを記念して、当時会誌編集委員長であった池田尚治教授の提言によって、「シンポジウム」形式にすることに改められた。

主な形式内容は次のとおりである。

- ① シンポジウム実行委員会、幹事会を新設する。
- ② 会期は2日間とする。
- ③ 会場は地方都市(持回り)とする。
- ④ 特別講演者、論文発表者ならびに参加技術者が自由に情報の交流ができる時間帯を設定する。

第1回大会をPC技術ゆかりの地、金沢で開催して以来、

現在ではPC技術協会の最重要な事業の一つになっている。

昨年の高松でのシンポジウムは17回目の開催となり、①本格的な技術展示の実施、②地元大学や高専との連携、さらには、③優秀講演賞の新設、など新しい取り組みを実施した結果、発表論文93編、出席登録者414名と前年度に比べて盛況となった。

表-7、図-3に、PCの発展に関するシンポジウムの推移を示したが、これを見ると、発表論文数に応じて出席者が増加している傾向が分かるので、まずは、発表論文を増やす努力が必要と考える。

表-7 PCの発展に関するシンポジウムの推移

	開催年月	場所	会場	論文数	出席登録者
第1回	1990.10	金沢市	金沢市文化ホール	87	270
第2回	1991.11	奈良市	奈良県新公会堂	72	295
第3回	1992.11	福岡市	福岡市博物館	86	352
第4回	1994.10	札幌市	札幌ガーデンパレス	90	332
第5回	1995.10	松江市	国びきメッセ	107	429
第6回	1996.10	名古屋市	名古屋国際会議場	128	568
第7回	1997.10	秋田市	秋田市文化会館	158	596
第8回	1998.10	松山市	松山市総合コミュニティセンター	160	560
第9回	1999.10	長野市	長野市メルパルク NAGANO	170	589
第10回	2000.10	兵庫県	淡路夢舞台国際会議場	173	702
第11回	2001.11	広島市	広島国際会議場	176	706
第12回	2003.10	仙台市	仙台国際センター	177	600
第13回	2004.10	佐世保市	ハウステンボス ユトレヒト地区	157	634
第14回	2005.10	新潟市	朱鷺メッセ	149	535
第15回	2006.10	岐阜市	長良川国際会議場	122	560
第16回	2007.10	つくば市	つくば国際会議場	89	377
第17回	2008.11	高松市	サンポート高松	93	414

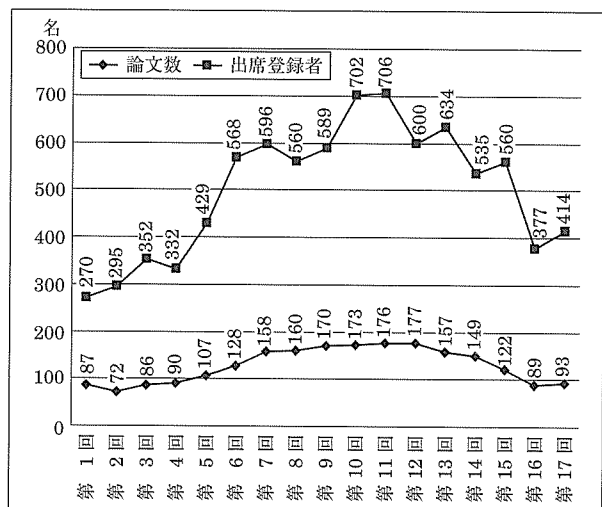


図-3 PCシンポジウムの論文数と出席登録者の推移

5.4 PC技術講習会

PC技術講習会は、40年近い歴史のある年次事業である。会員をはじめ、一般の建設技術者にもPC技術を啓発し向上を図ろうということで、昭和46年(1971)11月に第1回PC技術講習会が東京、大阪で行われた。

第150回理事会（昭和46年12月7日）議事録に「講師も驚く程熱心に聴講され……東京313名、大阪278名」とあり、誠に盛況であったと記録されている。

第2回講習会は、プレストレスト・コンクリート建設業協会協賛の下に、昭和48年（1973）11月から12月にわたり、大阪、名古屋、福岡、仙台、東京の5箇所で開催された。

その後、毎年1回全国各地都市で開催されているが、昭和55年（1980）からは、新潟と札幌においても「PC特別講習会」が半日の日程にて行われることになった。

毎年テーマを決めて、その都度テキストを作成し、最新のPC技術を講演しており、第1回から昨年開催の第36回までの参加者数は、図-4のとおりである。

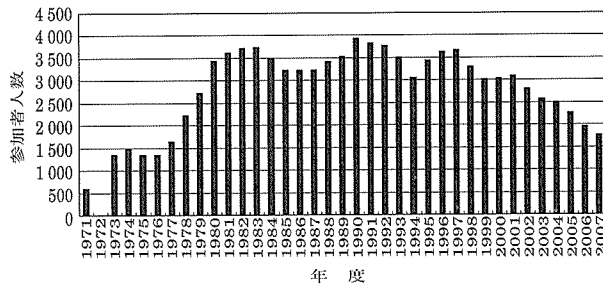


図-4 PC技術講習会参加者の推移

多い年には、約4000名の参加者があり、36年間で参加者総数は、約102000名を超えている。PC技術協会の大切な事業の一つである。

今年度は、第37回PC技術講習会として、PC建設業協会の協賛、土木学会、日本建築学会、全日本建設技術協会、セメント協会、日本コンクリート工学協会および建設コンサルタンツ協会の後援の下に、仙台、東京、大阪、名古屋、広島、福岡、高松の7箇所で開催予定である。そして、3月には札幌、6月には新潟で、半日日程のPC特別講習会を開催する予定となっている。

5.5 プレストレストコンクリート技士

PC技術協会では、PCの計画・設計・施工・管理に携わる技術者の質の向上を図り、PC構造物の品質を確保するとともに社会の進歩発展に寄与する目的で、平成5年度（1993）からプレストレストコンクリート技士（以下PC技士）資格認定試験制度を発足した。

最初の年は、フレッシュー技士の資格保有者に対する特別試験も実施した結果、4239名のPC技士が誕生している。

PC技士資格者数は、平成15年（2003）までは、毎年増え続けて7042名であったが、2007年度現在のPC技士資格者数は、6679名と少し減少傾向である（図-5）。

しかし、土木学会2007年制定のコンクリート標準示方書では、施工編12章プレストレストコンクリート12.1.2解説（2）に次のとおり記述されている。

『PCは、施工精度がかなり鋭敏に構造物の安全性に影響を及ぼすので、その影響の程度を十分に把握して施工する必要がある。したがって、PC技士など十分な知識と経験を有する専門技術者が施工を行わなければならない。』

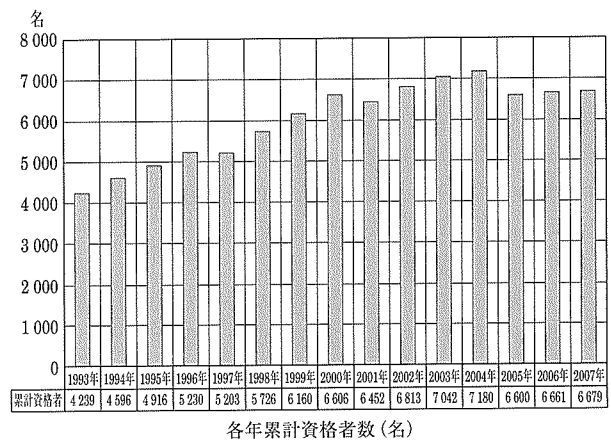


図-5 PC技士資格者数の推移

そして、現在では、PC工事の入札参加条件として求められるなど広く認知されてきている。

PC技術協会では、毎年、受験者のために試験講習会を実施するとともに、東京、大阪、福岡の3会場で試験を実施しており、PC技士受験者の便宜を図っている。

さらに、登録更新を忘れて、PC技士資格を失効した方にも上記講習会を受講することで、再登録を認めている。

5.6 コンクリート構造診断士

21世紀は、維持管理が重要な時代となる。そのための技術者を早急に養成することが社会のニーズとなっている。

PC技術協会は、長年にわたってPCとコンクリート構造物の建設、診断、維持管理に関する研究活動を行ってきており、多くの技術的な蓄積をもっている。これらを活用することによって、診断、維持管理に関する幅広い知識をもった技術者を養成し、社会に貢献するため、2007年度からコンクリート構造診断士制度を発足させた。

コンクリート構造診断士には、その高度な技術力と判断力に基づいた活動によって社会的な信頼を得て、多くの分野で重用され、活躍の場が広がるものと期待される。

この2年間の合格者の推移を表-8に示した。

表-8 受験者および合格者数

	2007年	2008年
受験申込者	154名	577名
受験者	143名	509名
合格者	134名	205名
合格率	93.7%	40.2%

2007年は限定された技術者（「技術士」など資格習得後10年以上）を対象としているため高い合格率であった。2008年は、限定された技術者には一部試験免除の優遇制度があるが、一般の受験者は資格に応じた試験科目となっており、若干合格率が落ちている傾向がみえる。

これから、歴史が始まる資格制度である。

5.7 委員会活動

PC技術協会の委員会には、今まで述べてきた主たる事業を運営する委員会と、直接PC技術に関する調査・研究活

動をする委員会がある。

前者には、「会誌編集委員会」、「技術協会賞選考委員会」、「シンポジウム実行委員会」、「PC技術講習会委員会」、「PC技士委員会」、「コンクリート構造診断士委員会」などがあり、PC技術協会の目的達成に必要な各事業の企画・運営を司っている。

そして後者には、「PC技術規準委員会」、「PC鋼材委員会」、「各種委託研究委員会」、「公募研究委員会」などがある。ここでは、後者の主要委員会を紹介する。

(1) PC技術規準委員会

平成6年度(1994)に委託委員会の一つとして設立された「PC技術規準研究委員会」が前身である。

受託による調査・研究を行い、すでに7つの規準を発刊している。その後、平成13年度(2001)に常設委員会となっている。

委員会の目的は、PC構造物の設計・施工規準類の整備を通じて、PC技術の向上に寄与することである。活動内容としては、新たな規準の企画、すでに発刊した規準改訂の企画、規準作成業務の受託および規準普及のためのセミナー開催の企画・運営である。

現在は、「PC斜張橋・エクストラードロード橋設計施工規準改訂委員会」が4月に改訂規準の発刊を目指し、精力的に活動を行っている。

(2) 公募研究委員会

PC技術協会が研究課題を広く公募し、それに応募された研究課題を「公募研究課題選定委員会」で審議・承認されて活動する委員会である。

平成13年度(2001)の「PC箱桁定着部の破壊解析委員会」が最初に設立された委員会である。その後、全部で3つの公募委員会が成果を発刊、セミナーなどを開催し、役目を終えている。

現在は、「PC構造物の復元設計手法の確立研究委員会」、「PC構造関連授業の実態に関する研究委員会」が、活発に活動中である。

6. おわりに

PC技術協会の歴史を書くために、古い資料を速読して何とかまとめてみた。PC技術協会の主要活動としては、このほかにもまだ、委託研究および共同研究などの委員会活動や特別講演会の開催などの歴史があるが、紹介しきれなかった。申し訳ないが、貴重な記録が掲載されているので、是非「50年の歩み」をご覧いただきたい。

今回は、短期間にいろんな資料を調査したが、その中には、30年前の座談会記事もあった。そこには、「PCがメタルと比べて主導権が奪えない要因として、『PCはすばらしいものだ、だが非常に特殊で、むずかしいものなのだ、われわれでなければとても扱えない代物なのだ』といったPCの売り過ぎが問題である。PC技術を難しいものとしな

『PCというのは、RCの延長にすぎず、力学的にはむしろ単純ですっきりした、やさしい学問なんだ』ということをもっとPRすべきでないかと考える。」との記述があった⁶⁾。

このことは、30年たった今でも解決されていないと感じるのは私だけであろうか。PC技術協会の一員として、PC技術は単純明快であることの普及に務めたいと思う。

事務局内には、50年分の資料が埋もれている。これを整理して、少ないスペースを有効に活用することが必要である。忙しさに追われていると、気がつかない間にどんどん資料があふれ、事業を行うごとに新しい資料が増えてくる。

今回の「50年の歩み」発刊を機会に、古い資料を整理して、要らない物を廃棄したいと思っている。しかし、経験の浅い事務局長には、何が要るか要らないかの判断が難しく、時間がかかりそうである。

なお、古い資料や記録を調べることで、PC技術協会の創立の経緯などを知ることができた。まだ、50年の途中段階は不鮮明であるが、創立時と現在を繋ぎ、それを延長すれば、目指すべき将来の方向が見えてくると思われ、この執筆が大変自分のためになったと感じている。

この機会を与えてくれた、会誌編集委員に感謝する。また、50周年記念誌編集小委員会WG委員が、調査してくれた貴重な記録を図表として利用することで、見栄え良くまとめることができた。お礼を申し上げる。

昨年12月には、新公益法人制度がスタートしている。学術団体であるPC技術協会は、当然公益社団法人に認定されなければいけない。PC技術協会の各種規則の整備や認定申請書の作成も楽ではないと思うが、事務局の献身的に働く経験豊富な女性スタッフの力も借りて、高いハードルを越えることを目指し、努力したいと思う。公益社団法人としての、新しい歴史を始めるために、皆様のご支援をお願いしたい。

この1年間、新米事務局長のため、気がつかないことが多く、ご迷惑をおかけしてきました。しかし、皆様の暖かいご支援で何とか無難に務めることができました。

今後とも、PC技術協会の発展のために、事務局に対して辛抱強く、ご指導とご支援をお願いしたい。

参考文献

- 1) 筒井：PC技術協会の歩みについて、プレストレストコンクリート、Vol.42, No.6, PP121～126, 2000
- 2) PC技術協会：30年の歩み, 1987
- 3) 本岡：編集委員会の思い出とPC建築の今後、プレストレストコンクリート、Vol.42, No.1, PP26～27, 2000
- 4) 後藤：サロン“30年のあれこれ”、プレストレストコンクリート、Vol.30, No.1, PP87～89, 1988
- 5) (社)土木学会：2007制定コンクリート標準示方書【施工編】、2008.3
- 6) 座談会：“PC技術の近況と将来”について、プレストレストコンクリート、Vol.20, No.1, PP20～34, 1978

【2008年12月8日受付】